遠藤汪吉先生を偲んで

浜　治世
（大学文学部教授）

遠藤汪吉先生が忽然として私たちの前を去られてから、はや一年が経とうとしております。七年前に卒業生の有志が集って先生の傘寿のお祝をいたしましたとき、先生は席上、少しはにかみながら「ぼくは皇寿の祝をしてもらうよ」と挨拶されました。百十一歳まで生きると断言されたこの先生のお言葉にすっかり乗って安心しきっておりました私にとって、先生の訃報は大きなショックでした。大好きでいらっしたピースの煙草を指にはさみながら「そりゃーきみー……だろう」とゆっくりとした独特な口調で議論をしかけてこられた先生の譬咳に、再び接することができなくなったのだと思うと淋しさがこみあげてきました。

先生は、実に気長で辛抱強い方でした。どんな苦難な時でも泰然自若としてことにあたられました。一九六九年、大学紛争の激化するさなかに先生は学長代行になられましたが、生来の強靱な忍耐力をもって耐えがたい時代をきりひらいて下さいました。しかし、先生のあまりに悠然とした対応の仕方にいらいらさせられた周囲の者は、先生のことを「ひるあんどん」と言って陰口をききましたが、先生は、「なあに無策の策ということばを知らんのかねえ。こんなときはじっとしているに限るんだよ。学生たちは、はしかにかかったようなもんだからねえ」と笑っておられました。

先生は一九三五年、京都大学で心理学をご専攻のあと、兵庫県立児童研究所において発達研究と児童臨床にたずさわれました。戦後、関西大学教授を経て同志社大学教授にご就任になり、爾来二十三年の長い歳月にわたって、同志社心理学の学問的発展と研究者の育成につとめて下さいました。先生の温和で寛容なお人柄は多くの学生を魅了し、卒業後もいつまでも慕われておられました。

私は先生が同志社大学にご就任されたときの最初の学生でしたが、いまでも心に残っているエピソードがあります。それは、心理学概論の学期末試験の日のことです。なかなか難解な問題がたくさん出されていました。ひとりの学生が問題の意味が分からなくて、監督をしていられた遠藤先生に質問をしました。すると先生は、「何だ君い、ぼくの講義をよくきいていなかったんだねえ」と言われ、試験の最中であることをお忘れになったかの如く、とくとくとその解答を話しだされたのです。

●遠藤汪吉氏略歴●

1905年９月　東京都で生まれる
1933年３月　京都帝国大学文学部哲学科卒業
1949年４月　同志社大学文学部教授
1961年４月～1963年　８月同志社大学学生部長
1961年11月　京都大学から文学博士の学位を授与される
1964年４月～1966年３月・1969年４月1970年３月
　　同志社大学文学部長
1968年４月～1970年３月
　　同志社大学アメリカ研究所委員長
1969年４月～1970年３月　同志社大学学長代行
1972年２月　同志社大学定年退職
1972年３月　同志社大学名誉教授の称号を受く
1992年４月１日15時、15分永眠85歳

まわりの学生も先生の〝特別講義〟に味をしめて、つぎつぎに質問をしました。先生はそれに対しても、懇切丁寧に説明をなさりこの型破りのテストは無事終了しました。私はこのとき、先生こそ真の教育者でいらっしゃるなあと感心したことでした。先生は点数や偏差値などにこだわらず、ひとりひとりの個性や創造性が充分にのびるように長い目で暖かく見守って下さる方でした。

先生の学問的関心は性格学を中心として広く心理学の諸領域にわたりましたが、一九四一年に弘文堂から出版された「性格学」は当時の心理学者の指針となる好著でありました。後年は北海道大学の水産学者であられたご尊父の影響もあってか、動物の比較行動学に深い関心を示されたようです。先生の博士論文は、比較行動論に基づいたモチベーションに関したものでありました。また晩年は、言語心理学にも強い興味をもたれるようになり、「ことばの心理学」という著書をナカニシヤ出版から刊行されています。

先生はこのように学者肌のかたでありましたが、一面、大学行政家としても優れた手腕をお持ちでした。大学長代行のほか、文学部長、学生部長、アメリカ研究所所長などの要職を立派に完遂されました。同志社大学ご退職後は、追手門学院大学教授、学長、学院長事務取扱いを歴任され敏腕をふるわれたとうかがっております。しかしながら、私のまぶたに浮かぶ先生は、卒業生の子どもや孫を目を細めてかわいがって下さった慈愛にみちた優しい〝おじいさま〟の姿です。また先生との楽しい想い出は、地方で開かれた学会からの帰途、皆で立ち寄った北海道や九州の雄大な大自然を背景としてふつふつとして心に涌きおこってくるものばかりです。

多くの人びとを愛された先生の心には深い宗教性と枯淡のかおりがありました。のこされた私たちは、先生の美しいご生涯を偲びながら、これからも同志社人としての歩みをつづけていきたいと存じております。